

## SPARC Japan セミナー2019 特別編

「オープンアクセスの今とこれから～ステークホルダーの戦略とともに考える～」

## パネルディスカッション

**林 和弘** (科学技術・学術政策研究所) ※※**武田 英明** (国立情報学研究所) ※**江川 和子** (東京大学附属図書館 / オープンアクセスリポジトリ推進協会 (JPCOAR)) ※※**笹淵 洋子** (早稲田大学図書館 / 大学図書館コンソーシアム連合 (JUSTICE))**小賀坂 康志** (科学技術振興機構) ※※

※学術情報流通推進委員会委員長

※※学術情報流通推進委員会委員

●**林** 残り時間はディスカッションに充てたいと思います。最初に武田委員長から、私を含む4者のお話について何かコメントいただくことは可能ですか。

●**武田** 今日、ジャーナルをどうオープンアクセスにするかということの具体的な取り組みを皆さんに紹介していただきました。国際的な問題に対応するという話と、国内の問題の話の二つに大きく分かれています。国内で言えば、少し気になったのは、林さんからもご指摘があった、国内のジャーナルがオープンアクセスのこの時代に生き残れるかという問題です。特に日本の場合、学協会が発行しているジャーナルが大部分で、これが果たして対応できるかということをお話を聞きながら感じました。かつて学協会にいらした林さんの経験を踏まえたお話の後、最後のお話の J-STAGE の問題から、当事者としての感想みたいなものを頂ければと思います。

●**林** ブーメランのように返ってきましたけれども、悩ましい問題で、学協会を離れて遠くから見直すと、やはり今、学協会は非常につらいと感じます。江川

さんから、新人研修を毎年できるというお話があったのが非常にうらやましくて、ワンパーソンライブラリアンなどという話がこの界限では議論になりますが、学協会は本当に基本的にワンパーソンパブリッシャーで、その人が抜けるまで次の人が来ないという極めてリスクの高いビジネスマネジメントになっています。オープンアクセスどころか電子化対応するのも大変だったということで、実は J-STAGE が救世主のように現れて、今、3,000 誌をホストするという歴史的な経緯があります。

だからこそ、小賀坂さんからご案内のあったように、コンサルテーションをすることで側方支援をしてオープンアクセス化を進めるということになりますが、逆に、JUSTICE さんや JPCOAR さんは学協会とのコミュニケーションはありますか。私が言いたいのは、今日お示ししたとおり、オープンアクセスのステークホルダーは多様に広がっていて、それぞれが対話をする中で競争や未来を見ていくということです。学協会のコミュニケーションは、研究者コミュニティとのコミュニケーションと言い換えることもできると思うのですが、そのあたりが正直全然なさそうなのです。なぜなのでしょう。

●江川 JPCOAR としては、例外がないではないですが、基本的にはリポジトリを持てる、持続的・固定的な組織や機関を中心としてコンソーシアムを組んでいます。学協会さんはそういう物理的なベースがないところが多いのではないかと思いますので、あまりお話をする機会がないのです。

●林 そういう意味では、コミュニケーションのルートがそもそも存在しにくいですね。

●江川 もちろん個別の先生方とはお話をしているのですが、研究者コミュニティと向かい合うという機会はあまりないように思います。

●林 これは答えが分かっている聞くのですが、笹渕さん、本来 JUSTICE の交渉相手には日本の学協会の購読誌があってもいいはずなのですが、実際そういうケースはどのくらいあるのですか。

●笹渕 幾つかあります。ただ、学協会という意味では、やはり国内よりもむしろ海外がメインになります。

●林 そういう意味では、日本の学協会向けのロードマップは、それはそれとして考えていかれるのでしょうか。つまり、現状は交渉されていくということになるのですよね。

●笹渕 そうですね。お話ししていけるといいのかなと思います。

●林 まだ、お話を始めてはいないですか。

●笹渕 始めてはいないです。

●林 そうすると、学協会側が層が薄く、かつ流動性が少ないので、交渉の仕方も海外とは変わってくるのかなと思うのですけれども、小賀坂さん、この議論で

何かコメントはありますか。

●小賀坂 武田先生がおっしゃるように、国内のジャーナルがどう生き残っていくかという話をしたとすると、実はこれは日本だけの問題ではなく、どの国でも学協会ベースのジャーナル青息吐息で、やめてしまうか、商業出版社に買われていくかしかないのです。結局これは、学会によっては時代の流れに付いていなくて財政基盤を失っていき、出版機能を回せないという問題に根差しています。ですから、もし日本でのジャーナルをどうするかということ論じるのであれば、日本の学協会はどうなっていくかところから始めなければいけないと思います。

●林 そのとおりですね。

●小賀坂 一方で、日本の学協会の数は 3,000 とも 4,000 ともいわれていますが、そういうフラグメント化された学協会のあり方は、日本の強みも表しているはずですが、非常に多くの学術誌があるわけですが、このありようを強みに変えることができるのではないかと思います。それが、これからの学協会の在り方と学協会のジャーナルの在り方を考える上での議論の方向であり、日本ならではのスタイルを見いだしていくことではないかと思います。

●林 そこから議論をつなげると、JPCOAR さんは情報を発信していくという方向性を打ち出されていますが、学協会が極めて厳しい状況の中で、では JPCOAR が前に出て、発信を文理融合も含めてオールディシプリンでやっていこうという強い姿勢が出ているわけでもないのでしょうか。

●江川 そうですね、はい。

●林 そのあたりは、なぜでしょうか。

●江川 やはり、リポジトリには保存の意味があるので、ある程度、強固で持続的な組織を JPCOAR としては対象としていると思うのです。学協会の場合、今、発信することはできるかもしれませんが、その後、責任を持ってずっと維持していくことが、例えば JPCOAR の主な会員である大学等と同じようにできるのかということが心配です。個人的な意見になりますが、そういう気がします。

●林 午前中の議論につながりますね。話が拡散するのを無理やり戻すのですが、今日のお題は「オープンアクセスの今とこれから」ということです。そうすると、結局われわれはどこに向かえばいいのだという話になってくると思うのです。そのときに、論文のというふうに限定的に考えると、日本の状況としては J-STAGE の学協会が、ブロンズが多いけれども 8 割はオープンアクセスになっている。機関リポジトリの方では、グリーンに関しては少なくとも箱としては着々と進んでいるという中で、小賀坂さんがおっしゃったグリーン OA を把握するのが難しいというのは、JPCOAR さんがかなり協力できそうな気がするのですが、どうなのでしょう。

●小賀坂 そうだと思います。

●林 そこが没交渉なのが。

●武田 そこを国内に関して言えば NII が IRDB でやっています。ただ、IRDB の場合、きちんとジャーナルにひもづいているかということが知りたいと思うのですが、そういう情報が IRDB だけでは分かりづらい。それは図書館側の、きちんとメタデータを入れてくれるかということがあるので、やはり IRDB だけでは難しいと思います。

●小賀坂 とにかく著者の同定とファンド元の同定は絶望的に大変なのです。そこに人件費がかかっている

からです。そういうものはもう少し機械化などをしてコストを下げていかなければいけないと思います。JPCOAR なり何なりと同じことをやろうと思うと、同じぐらいの規模のマンパワーがかかります。ですから、実は JPCOAR の皆さんと議論したこともあって、とにかく論文のひもづけをしなければいけないのですが、論文との論文のひもづけ、パブリッシャーが入っている論文と機関リポジトリに記録されているアークルとのひもづけは、伝統的な内製作業ではできません。やはり DOI のひもづけしかないということで、今、日本のファンド事業はどれも成果論文の報告はほぼ DOI の報告を義務づけています。JST の場合だと確か 8 割ぐらい、科研費でも軽く 5 割は超えるぐらい DOI が入っています。入っているだけで正しくないものもあるのですが、入るようになってきているので、その辺をじわじわ進めていくと、ある日突然、何もなくても簡単にひもづくようになっていてはないかと思っています。

●林 そうですね。あとは ORCID と Crossref のオートアップデートみたいなことで、普段どおりに研究者が活動していくと自然とひもづけがされていって、どこかで一箇所にたまるという仕掛けが重要です。このお話は、どちらも欧米主導型ではありますが、それをインフラとしてそれに日本の情報を組み合わせていき、ネットワーク化して、今でいうナレッジグラフ的にしてモニターできるようにすることで新しい価値を生み出せます。今日の議論の一つの結果は、ただオープンアクセスにするのではなく、オープンアクセスしたことが分かるような取り組みが必要で、技術的にできることはたくさんある。ただ、コストやステークホルダーの調整がこれからまだまだ必要であることが分かったということだと思います。

パネルの議論はこれぐらいにして、質問を一つ二つぐらいお受けできればと思いますが、どなたかいらっしゃいますでしょうか。

●フロア 1 オープンアクセスの目的は、論文をオープンにしてたくさん読んでもらうことだと思います。今日の話の中で出てきたゴールドとか何とかがありますが、実際にどのオープンアクセスがどれくらい読まれているのか、そして、どこからアクセスがあるのか、国内なのか、海外なのか。そういう分析はどこかでされているのでしょうか。されているなら、その結果はどうでしょうか。

●林 このような分析の基本は、やはり出版元が一生懸命ジャーナル単位で分析するということが多くて、それを横並びでやるという提案になりますね。

●フロア 1 例えば機関リポジトリをやっているような大学や研究機関は、ご自身の組織のアクセス状況の分析などをされているのでしょうか。

●笹淵 大学によってはきちんとしているところもあると理解しています。

●武田 その評価は非常に難しく、いわゆるオルトメトリクスとって、アクセス数なのかダウンロード数なのかなど、いろいろ議論があります。ダウンロードやアクセス数は一応、取る仕組みはあって、データとして出しているところはあるのですが、問題が信用できないところがあることです。つまり、ダウンロードが多ければいいのか、アクセス数が多ければいいのか。DOIであれば、例えばDOIのIDにアクセスした数なども出していますが、普通の意味での利用数とは少し違う意味になってしまうので、そこがポイントです。データは出せるけれども、本当にそれが学術としての価値なのかというのは疑問だということで、議論しているところです。

●フロア 1 OA化は私ももちろん大賛成で、いろいろお手伝いさせていただいていますが、本当にOAになって読まれるようになったのかということが分から

なくて、何となく成果を知らないまま、ただただ前に進んでいるという感じです。

●武田 幾つかの研究論文で、一応、OA化した論文と非OA論文でサイテーションが違ってくるかどうかということが検討されていて、やはり何割かはアップすることです。OA化することによって、少なくとも減った例はなく、一応、学術コミュニケーションを研究する研究者の分析としては、増えるという結果が出ています。

●フロア 1 そうですね、はい。

●林 あっという間に時間になってしまいました。もう一つぐらい質問をお受けできればと思ったのですが、ファシリテーターが不案内で恐縮です。足早ではごさいました、今日ご登壇いただいた皆さまに感謝を申し上げます。どうもありがとうございます。